

表2.1 放射線障害の分類

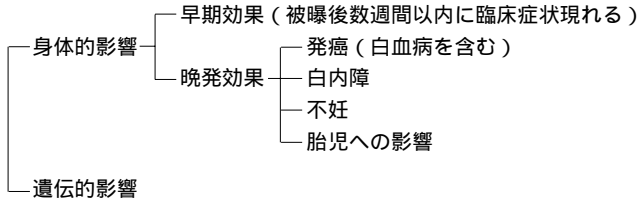


表2.2 放射線防護の観点からの分類

確率的影響：しきい線量なし	線量の増加で障害の発生確率が増加する (例：遺伝的影響，発癌)
確定的影響：しきい線量あり	線量の増加で症状の重篤度が増加する (例：皮膚紅斑，不妊，白内障等)

ば眼の水晶体，皮膚の紅斑・脱毛，造血機能の低下，不妊など）がすべて含まれる。この両者の主な違いは，線量しきい値の有無および線量効果関係にある。すなわち，しきい値（影響が現れる最低線量値）は確定的影響では存在するが，確率的影響では放射線防護の観点から存在しないと仮定している。また，線量効果関係は確定的影響では被曝線量の増大と共に症状の重篤度が増す関係にあるが，確率的影響では被曝線量の増大により症状の重篤度ではなく，障害発生の確率が増える点で異なる（図2.1）。

## 2.2 人体諸臓器への影響

放射線の被曝による人体への影響は，実効線量あるいは等価線量の大きさが特に重要であるが，放射線の種類・エネルギー，被曝部位・その大きさ，組織・臓器の種類，時間的分布などにより，また，被曝者の年齢・性別によ